

How to

学生目線でのグローバル人材育成プログラム
再構築に向けての
3ステップ



村上 宙

むらかみちゆう●(株)進研アド 教育改革支援室グローバル支援部。主に大学の国際化や、グローバル人材育成支援に携わる。

取材・文／本間学 撮影／亀井宏昭

さまざまな留学制度や語学教育プログラムを用意しても、学生が積極的に参加しなければ意味がない。プログラムを活性化させ、大学の特色化につなげるにはどうすればよいのか？ ワークショップ形式で考えていく。

プログラムが活性化しない理由は
学生の「内向き志向」だけではない

今のプログラムは学生の
ニーズに合ったものか？

現在、多くの大学がグローバル人材の育成をめざして、留学プログラムや語学教育の拡充に力を入れていきます。しかし、実際に教職員の方に話を聞いてみると「せっかくプログラムを用意したのに、積極的に参加する学生が少ない」「想定していたような成果が挙がらない」という声をよく耳にします。なぜ、このような状況になってしまっているのでしょうか？

思います。

例えば、苦勞して海外の提携校を増やして各種留学プログラムを用意しても、その枠が埋まらないという問題。その原因を「今の学生は内向きで、海外で学ぶことへの興味・関心に乏しいから」とする意見があります。しかし、そもそも学生の目を海外に向ける仕掛け——グローバルな環境下で学ぶ意義を伝えたり、実感させる工夫——を用意しているかという点ではいかがでしょうか。

やお金をかけてまで、わざわざ参加する必要を感じない」と留学に積極的でないのも無理はないでしょう。

このように考えると、留学プログラムが活性化しない理由は、「学生の内向き志向」だけでは片付けられないように思えます。現状のプログラムが学生の関心を引き、ニーズに合ったものなのか、もう一度、学生目線に立って点検してみることがあるのではないのでしょうか。

自学の取り組みを整理し
課題を洗い出す

プログラムをうまく機能させるためにはどうすべきか、ここからは3つのステップに沿って考えていきたいと思います。

【STEP1】は「現状の取り

組みの整理」です。左ページの表にグローバル人材育成関連の取り組みを「教養・専門教育」「語学教育」「留学・国際教育」の3つに分けて、入試〜4年次の時系列に沿って記入してみてください。22ページからの大学事例を参考にしてもよいでしょう。各プログラムには「必修」なのか「希望者のみ」なのかを書き込みます。「語学教育」の欄には、成果を測る外部検定試験等も記入してください。

次に書き込んだ取り組みを、【STEP2】に示した「学生目線」の観点からチェックしてみましよう。この作業を通して、「プログラムが点在し、連携していない」「学生にプログラムが十分に周知されていない」「成果を測るしくみが無い」など、これまで気づいていなかった問題点が見えてくるはずです。

STEP 1 自学の取り組みを整理してみる

めざすグローバル人材像

	入試	1年	2年	3年	4年
教養・専門教育					
語学教育					
留学・国際教育					

STEP 2 課題を洗い出してみる

<p>プログラム全体</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 専門教育との連携がとれているか <input type="checkbox"/> DPから逆算したプログラムになっているか <input type="checkbox"/> 各プログラムは線でつながっているか <input type="checkbox"/> 目標が段階的に明示されているか <input type="checkbox"/> 効果を検証し改善できるしくみがあるか <input type="checkbox"/> 各プログラムは学生のニーズに合っているか <input type="checkbox"/> モチベーション向上のための仕掛けはあるか <input type="checkbox"/> 学生が成長を実感できるか (希望者制のプログラムがある場合) <input type="checkbox"/> プログラムへの参加を促す仕掛けがあるか <input type="checkbox"/> プログラムの広報活動はできているか <input type="checkbox"/> 学生へのプログラムの周知はできているか 	<p>語学</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 受講者のレベルが正確に測れているか <input type="checkbox"/> 学生の能力や目標に合ったレベル、内容か <input type="checkbox"/> 一人ひとりが発話する機会が十分にあるか <input type="checkbox"/> 語学力の伸長を図るしくみがあるか <input type="checkbox"/> 専門教育との関連性はあるか <input type="checkbox"/> モチベーション向上の仕掛けはあるか 	<p>留学</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> プログラムの目的が明確か <input type="checkbox"/> 期間や渡航先は適切か <input type="checkbox"/> 専門教育や就活への影響はどうか <input type="checkbox"/> 前後の語学教育プログラムは十分か <input type="checkbox"/> 行って終わりにならない工夫があるか(希望者制の場合) <input type="checkbox"/> 希望者全員が行くことができるか
---	--	---

STEP 3 理想のプログラム設計のステップ表を描いてみる

	設 問	回 答
DP	〇〇学部・学科の育成する人材像は？	
	〇〇学部・学科におけるグローバル人材とは？	
	卒業時に身に付けてほしい力は？	
CP	その力を育成するために必要なプログラムは？	
	それぞれのプログラムをつなぐ仕掛けは？	
AP	どんな学生に受けてもらいたい？	
	(選抜する場合) 選抜は入試前？入試後？	
IR	成長可視化のしくみは？	

学生が自分に合ったものを選ぶ「アラカルト型」です。この場合、各プログラムが「点」として存在してしまっているため、「一貫した教育になりにくい」というデメリットがあります。ただし、そもそもプログラム数が少ない大学は「点」を増やすべきでしょう。「全体型」は、各種プログラムと学部教育が「一本の線」でつながっているものです。語学教育プログラムと留学を必修とすることで、学部・学科の学生全員に同じ水準の教育を提供することが可能になります。ただし、学部・学科全体規模での実施となるので、プログラム構築の難度は高くなります。

3つめは「オーナーズ型」です。成績優秀者を対象とした少人数コースをつくり、一本の線でつなげる形です。全体型と比べて人数を絞り込んでいるため、特化した内容のものがつくりやすく、実施の負担も少なくなります。高い成果が挙げられ、人数の枠を広げていくことも考えられます。加えて、「オーナーズ型」で構築したプログラムは、フラッグシップモデルとして大学の看板になる可能性もあります。これは、大学のブランディングにも関わることです。

例えば近畿大学の国際学部は1

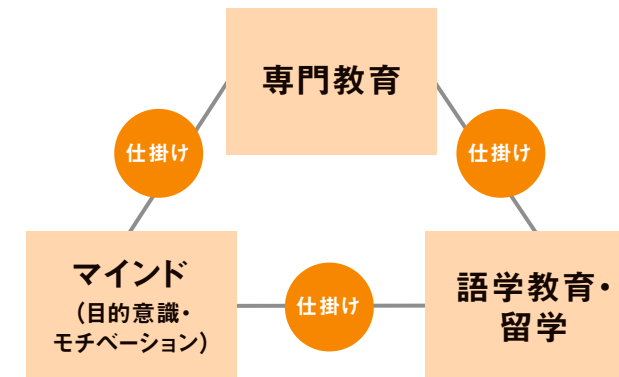
年次から全員留学という特徴的な教育をする学部ですが、これにより同大学は国際的なイメージの浸透に成功しています。これは国際学部が全学の中で国際化を象徴する存在となった例でしょう。武蔵野大学(P24)も「アラカルト型」+「オーナーズ型」で国際的な大学としてのブランド化に取り組んでいます。

ブランディングを考える際、特定の学部・学科を集中的に強化するやり方は、特色として認識されやすいでしょう。

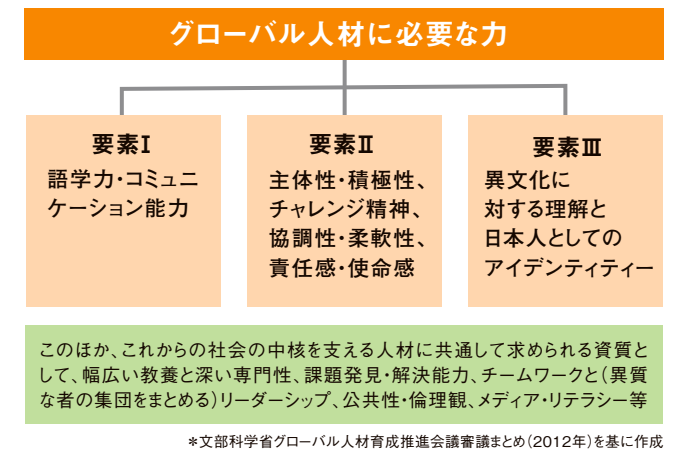
最後に、【STEP3】の表を基に自学の理想的なプログラム設計を考えてみましょう。学部・学科で育成をめざす人材像から逆算し、3ポリシーごとにそのために必要なナレッジ、アビリティ、マインドを育成する施策を具体的に落とし込んでいきます。併せて学修成果の可視化のしくみも設定しておくことが重要です。

以上、学内でプログラムの再構築を検討する際、現状と論点整理のしかたの例をお示ししました。周知のとおり高等教育は国際的に「ラーニング・アウトカムズ」重視へと転換しています。この流れをふまえて、グローバル人材教育を見直してみる必要があるのではないのでしょうか。

【図表2】グローバル人材に必要な力の育成のしかた



【図表1】グローバル人材の定義



【図表3】グローバル人材育成プログラムの類型

アラカルト型	全体型	オーナーズ型
<p>語学教育や留学プログラムなど、各種のプログラムが「点」で存在している状態。各プログラムごとの位置付けがわかりにくい、参加は希望者制のため任意のことが多く一貫した教育になりにくいといった悩みがある。</p>	<p>各種プログラムと学部教育を、一貫した「線」でつなぎ、学部・学科・専攻などの学生全てを対象にしたプログラムの形態。必修とすることで、全体に同じ水準の教育を用意できるが、プログラム構築難度が高い。</p>	<p>成績優秀者、コースなど、対象者を絞り、「線」で設計されたプログラムの形態。全体型に比べて対象者が少ないため手をつけやすく、特化したものをつくりやすい。フラッグシッププログラムとして大学の看板になる可能性も。</p>

プログラム同士をつなぐ仕掛けの重要性

現状のプログラムの問題点が見えてきたら、自学に合ったプログラムの形を考えていきます。しかし、その前に「グローバル人材に必要な力」と「それをどうやって育成するのか」を整理してみましよう。

文部科学省「グローバル人材育成推進会議」ではグローバル人材に必要な力として、「語学力・コミュニケーション能力」「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の3つの要素を挙げています【図表1】。

一般的にこれらを育成するため大学では、学部・学科での専門教育のほかに、マインドの育成、語学教育や留学などを用意しています。

「内向き」の学生が少なくない昨今、メニューやプログラムだけを用意して後は学生任せのままではなく、大学のほうでめざす人材像に向けて望ましい学びを促す仕掛けを随所に用意し、学部教育全体の中で流れをもった設計と、有機的に相互作用を生み出すしくみづくりが求められます【図表2】。

それぞれがシナジーを生む「仕掛け」とは、目的意識・モチベーションを高めるマインドセットの取り組みだけではありません。たとえば専門教育と語学教育の内容の連動、留学前後の語学力アップの取り組み、アセスメントを実施することによる学生が成長を実感できるしくみなど、さまざまなものを含みます。

もちろん各プログラムの活性化を図るうえでも、仕掛けは重要なポイントです。留学プログラムを例にとれば、成長へのビジョンが見えていないと、学生は居心地のよい日本を離れ、あえて海外に出ようという気持ちにはなれません。具体的にイメージし、実感するきっかけがあれば、興味を持つ学生は増えるはずです。

プログラム設計の際に考えるべき3つの型

では、4年間を通してのプログラムの全体設計について考えてみましょう。多くの大学の例を見てみると、大学のグローバル人材育成プログラムは、【図表3】で示したような3つのタイプに分けて考えることができます。このうち最も多いと思われるのは、大学がさまざまなプログラムを用意し、